

## 『狭衣物語』論 及びその成立年代について

飯 島 裕 三

はじめに

平安時代後期の物語について、前回は『夜の寝覚』、前々回は『浜松中納言物語』を「高等科紀要」に発表した。それに続けて今回は、『狭衣物語』について考察したいと思う。

正治二年（一二〇〇）～建仁元年（一二〇一）の頃に成立したといわれる『無名草子』に、

『狭衣』こそ、『源氏』に次ぎては世覚えはべれ、『少年の春は』とうちはじめたるより、言葉遣ひ、何となく艶にいみじく、上衆めかしくなどあれど、さして、そのふしと取り立てて、心に染むばかりのところなどはいと見えず。またさらでもありなむとおぼゆることもいと多かり。

（小学館・新編日本古典文学全集『松浦宮物語 無名草子』一二〇頁）

とあり、「狭衣は源氏に次いで世間の評判が高いけれど」とまず世間的に「狭衣」は評価されていると述べる。文意は「こそ」が「はべれ」に係っているので、「高いけれど」といったん逆接となるが、次に続く一文、「少年の春」で始まり「上衆めかしくなどあれど」がまた逆接になっているので、ここまでは挿入句と考えられる。なので、ここは前の文を受けて「確かに、冒頭部分の書き出しや、言葉遣いは何となく優美で、高貴な人々を描くようではあるけれど」、「さほどこれといって取り立てて、心に染み入るようなところは物語中にはあまり見えない」と貶し、「さらでもありなむとおぼゆることもいと多かり」と、『狭衣物語』をあまり認めようとしめない。「狭衣」は『無名草子』の中では『源氏物語』の次に取り上げられているにもかかわらず、その評価はあまり芳しくない。日本古典文学全集本の『無名草子』によれば、『源氏物語』には三〇頁以上を費やしているのに、『狭衣物語』には五頁弱しか筆を割いてないのもその低い評価の表れであろう。『無名草子』が書かれた当時と、『狭衣物語』が成立した時代には百数十年の開きがあるが、現代の我々に比べれば、はるかに執筆当時に近い評価である。そこで我々もその評価を当時の一般的な受け取り方だと思いがちである。だが、本当に『無名草子』の批判は当たっているのだろうか。この小論ではその辺の事情をも合わせて考察していきたい。この『無名草子』の評価については、第三節で詳説したいと思っている。

考察を始めるにあたって、『夜の寢覚』の現存本文には、かなり大きな欠落部分が存在する。また『浜松中納言物語』の場合はその首巻が散逸してしまっている。その欠落部分については『風葉和歌集』などの資料によって補うことで、大体の内容は推測できている。だが、『狭衣物語』は、本文についてそれらの物語類とはまた異なる問題が存在する。現在までの研究によって『狭衣物語』の伝本系統は、三系統ないし四系統あるといわれる。しかし分類された四系統が他の諸本とはつきりとした違いを持っているかという点、そこには複雑な問題が介在していて、いまだに明快に異本の成立過程を説明することが出来ていない。その辺の事情を今、日本古典文学全集の『狭衣物語』の伝本について書かれた後藤祥子氏の解説を参照しよう。

〔『狭衣物語』は〕長らく秘庫にあった重要伝本の多くが影印や翻刻によって提供され、本文研究は著しい成果を挙げた。そして、資料の全容が明らかになればなるほど、その錯綜した本文の有り様が再認識され、いわゆる系統図やすつきりと分類された一覧を企図することの無効が追認されて、集団や群として並列するゆるやかなまとめ方が、この作品自体の伝本研究の方法として大方の同意を得てきたものと思われる。(中略) 加えて、親本に比定し得るような古伝本に完本が少ないことは、オリジナルの決定を困難にしている。こうした現象から私どもは、この物語特有の愛玩のされかたを窺うことが出来るであらう。

(小学館・日本古典文学全集『狭衣物語』1 解説・三二一～三二二頁)

以上、引用したように、『狭衣物語』は『源氏物語』などとは異なり、簡単に最善本を特定できるような状況にはないのだ。その決定的な要因は、歌人でもあり、古典学者でもあった藤原定家による校訂本文が存在しないことが挙げられる。裏を返せば、『狭衣』に限らず、定家は後期物語にそれほど関心を持っていなかったというべきかもしれない。それは仕方がないことでもあった。何故ならこの時代にはほとんど無数といっていいほどの物語が量産され、ついには「歌合」ならぬ「物語合」なるものまで開催されたのであった。この物語のブームは、物語の質を下げたことが容易に想像される。読み捨てにされた物語群が、いわゆる散逸物語といわれ、現在その名前だけが残るものが多数存在する。これらの物語群は『伊勢』・『竹取』・『源氏物語』などの平安前・中期物語の影響を強く受けて創作されたと思われる。とりわけ『源氏物語』の影響は大きかったはずだが、ということはどの作品も似たり寄つたりの筋立てになり、よほど変化に富んだ内容を持たない限り、読者側が認めなかったはずである。認められなければ書き写されることもなく、読み捨てられていったに違いない。それらが現在名前だけを残す散逸物語の実態といつてよからう。

このような後期物語が読者に受け入れられ、生き残るためには、先行する作品の筋書き、登場人物などを自作の中に取り入れ

つつも、いかにそこから脱出し、読者に喜ばれる自前のストーリーを提供できるにかかっていた。『夜の寝覚』における年齢差を超越した愛の形、『浜松中納言物語』における時空を越えた愛の形、それらは従来にはないものであった。それでは『狭衣物語』による新たな発見は何であったか。それを探ろうとするのがこの小論の目的でもある。ただ、筆者は、『狭衣物語』の異本群が多いということが、『狭衣物語』にとつての不幸であったのではないかと考えているのだ。

先に引用した中で、後藤祥子氏が『狭衣物語』の異本の多さについて、「親本に比定し得るような古伝本に完本が少ないことは、オリジナルの決定を困難にしている。こうした現象から私どもは、この物語特有の愛玩のされかたを窺うことが出来るであろう」とあった。筆者は、「愛玩」という言葉が果たして適切であるかどうか迷うのであるが、物語の筋立てに異議があるなら、自分の思うようなストーリーに書き直すことが許されるということは決して「愛玩」ということではないと思う。物語を軽侮した行為にはかならない。そのことによつて『狭衣物語』が主張したかった意図が、ぼかされてしまった可能性があるのではないかと思うのである。

この物語の本文系統について不明なことも多いのだが、この小論は小学館の「新編日本古典文学全集本」を底本として考察を進めることにする。全集本は、現在第一系統と分類されている「深川本」（鎌倉初期書写）を底本としている。なお、『狭衣物語』は全四巻からなるが、深川本は巻四を欠き、その巻四には伝二条為定本を充てていることを最初に断つておく。

# 一 『狭衣物語』のめざしたもの

『狭衣物語』の主人公狭衣の、超越的な才能が描かれる場面がある。それは五月五日の節句の日の夕刻、帝の前で横笛を吹くと、紫の雲がたなびき、笛の音に魅せられた天稚御子が天から降りてきて、狭衣を天上に連れ去ろうとする場面である。

宵過ぐるままに、笛の音いとど澄みのほりて、雲のはたてまでもあやしう、そぞろ寒く、もの悲しきに、稲妻のたびたびして、雲のたたずまひ例ならぬを、神の鳴るべきにやと見ゆるを、星の光ども月に異ならず輝きわたりつつ、御笛の同じ声に、さまざまの物の音ども空に聞こえて、楽の音いとおもしろし。（中略）楽の声いとど近くなりて、紫の雲たなびくと見るに、天稚御子、みずら結ひて、言ひ知らずをかしげに香ばしき童にて、ふと降りたまふと見るに、糸遊のやうなる薄き衣を（狭衣）中將の君にうち掛けたまふと見るに、我はこの世のこともおぼえず、めでたき御ありさまいみじうなつかしければ、この笛を吹く吹く帝の御前にさし寄りて、参らせたまふ。

この時は帝が泣いて引き止めたので、狭衣は地上に残ることが出来たという。ここにある「糸遊のやうなる薄き衣を（狭衣）中將の君にうち掛けたまふと見るに、我はこの世のこともおぼえず」を目にした読者は、当然のように『竹取物語』を思い浮かべるはずだ。竹取では「天の羽衣」を着れば人間界のことを忘れてしまうとあった。また狭衣が天稚御子を「めでたき御ありさまもいみじうなつかしければ」とあることに注目すれば、この「なつかしければ」は、親近感を抱き親しみたいという意味だから、つまり天稚御子は狭衣と同族であり、物語には書かれていないが、狭衣はもともと天界に住する人であり、やがてはかくや姫のように天界に回帰して行くというストーリーが、読者には思い浮かべられたであろう。その一方で楽の音に感応して天稚御子が天下つてきたという展開を読むと、読者には、『宇津保物語』の「俊蔭」が思い起こされるはずだ。俊蔭は波斯国に渡り、阿修羅から秘琴を手に入れ、それを弾くと天人が降下してくる場面が次のように描かれていた。

阿修羅、いやますますに怒りていはく、「汝が累代の命をとどめむとても、この木一寸を得べからず。そのゆゑは、世の父母、仏になりたまひし日、天稚御子下りまして、植ゑし木なり」（中略）

阿修羅、木をとり出でて割り木づくる響きに、天稚御子下りまして、琴三十つくりて上りたまひぬ。かくて、すなはち、音声樂して、天女下りまして、漆塗り、たなばた、緒よりすげさせて上りぬ。（中略）

照る日の午ときばかりに、琴の音をかきたてて、声ふりたてて遊ぶ時に、大空に音声樂して、紫の雲に乗れる天人、七人つれて下りたまふ。  
(新編日本古典文学全集『宇津保物語』「俊蔭」・傍線筆者二四～二九頁)

『宇津保物語』には『狭衣物語』と同じように「天稚御子」が出現し、また両者ともに音楽によって奇瑞譚が描かれるという共通点が見られる。まさに『竹取物語』と『宇津保物語』「俊蔭」巻を融合した、新たな伝奇物語が始まる期待感を読者に抱かせるよう仕組まれているのだ。ところが物語が進展して行くと伝奇的な描写は時々顔を出す程度で、そういう雰囲気は徐々に薄れてしまう。そして物語の中心は『宇津保物語』の登場人物の一人、仲澄とあて宮との実の兄妹の悲恋物語を連想させる展開になっていく。

そもそも『狭衣物語』という題名の由来は、次の一首によっていた。

いろいろに重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜の狭衣

(巻一・五四頁)

この歌は狭衣と兄妹同然に育てられた、源氏の宮に贈られたものである。歌意は「色とりどりに衣を重さねるように、次々と女性に思いを寄せるようなことはするまい。自分は人知れず一人のお方(あなたを)を思い初めてしまったのだから」という源氏の宮に対する一途な、しかし許されない恋心を詠んだものである。『狭衣物語』というのは、実はこの歌に象徴されるように、決して結ばれることが許されない一人の女性(源氏の宮)を愛し続ける物語なのである。何故結ばれないかをくり返しているうら、源氏の宮と狭衣は、幼い頃から実の兄妹同様に育った間柄だからであった。

源氏の宮と申すは、故先帝の御末の世に、中納言の御息所ときこえたまひしが御腹に、類なくうつくしき女宮生まれたまひしを、末にならせたまへる、今さらのほだしを、心苦しう思しめししほどに、三つになりたまひし年、院も、母御息所も、うち続き隠れたまひしかば、いと心苦しくて、この斎宮の、やがて迎へ取りきこえさせたまひて、中将(＝狭衣)の同じ心に思ひかしづききこえさせたまふ。

(巻一・二七頁)

つまり、故先帝を父とし、御息所を母として生まれたのだが、その両親に三歳の折先立たれ、先帝の妹君であった狭衣の母(もと斎宮)と、父堀川の大臣夫妻に引き取られた。そこで狭衣とは両親からも、周囲からも実の兄妹のように育てられたというのである。こういう環境によって二人の間には決して越えてはならない男女としての一線が画されてしまう。ところが、こういう禁断の愛情問題ははつきり書くことが躊躇されたのであろうか、分かりにくい表現になっている。

(狭衣は) 世の男のやうに、おしなべて乱りがはしくあはあはしき御心さへぞなかりける。夢ばかりもあはれをかけたまはん蔭の木草(中下流の女君)などをも、同じ心に思し放つべくもなければ、いかなるにか、この世はかりそめに「世界不牢固」とのみ思さるるぞ、げに、世の人の言ぐさに思ひ聞こえさせたるやうに、いかにも変化の現れたまへるにや。人よりはものすさまじげに、口惜しき方も思ひきこえさせたまへる人もあるべし。

(巻一・二四頁 傍線筆者)

日本古典文学全集で小町谷照彦氏(以降、全集と呼称する)は、この箇所の小見出しに「五、狭衣の女性に対する控えめな態度」と付けた。そして傍線箇所を「他の男君よりは女性に関心をお持ちでないようで、残念なこととも思い申しなさっているお

方もあるに違いない」という口語訳を付けている。筆者も最初はこの部分をそういう解釈で受け止めて読んでいたのだが、読み進めるにしたがって狭衣の思考についていけなくなり、狭衣像に違和感を生じた。そしてもう一度この箇所に戻り、考え直してみた。その結果今は次のように解釈するのが正しいのではないかと思っている。

まず、筆者も「いかなるにか、この世はかりそめ」以降、文末までのつながりは分かりにくいと感じる。だが全集のようにここを「他の男君よりは女性に関心をお持ちでないようで」と訳すのが適切かどうかは要注意だと思う。狭衣は軽々しく女性に言い寄ったりはしないが、決して女性に関心を持たないわけではない。だからここでの「すさまじげに」は「人々は何とも気持ちい冷めるようで」という意味で、次の「口惜しき方も、思ひきこえさせたまへる人もあるべし」は「思いを掛けるのは感心しない方だとしても、思いをお掛けなさっている方もきつとおありなのだろう」という遠まわしの近親愛忌避の表現だと考える。そう読むと、初めて文意が通ってくる。実際物語中でも、狭衣は女性に対して控えめでもなく、女性嫌いでもない。むしろどのような階層の女性でもいったん関係が出来れば強い愛情を注ぐ。そこで「いかなるにか……」以降の意味は、「どうしてだろうか、この世はかりそめで無常だとばかり思われるのだ。世間の人が口癖のように思い申し上げるように、（狭衣は）まったく変化（へんげ）の者がこの世に現れたのであろうか。世間の人間も受け入れられない気持ちも冷めるような、思いを掛けるなど感心できないお方にも、きつと思いを抱きなさっている方がいらっしゃるに違いない」。どうも訳を付けるとまどろっこしいのだが、つまり、狭衣は節操もなく軽薄な男ではないが、仏神の化身がこの世に現れたのか、人間には思いも寄らない方への愛情をお寄せ申し上げている方（妹君の源氏の宮）もきつといるに違いない。女嫌いどころか、むしろ思い込んだら普通の男などが及ばないほどルール無視の一途な愛に生きる男、といっているのだ。全集のような解釈ではとうていその核心に届かないといわざるを得ない。となると、また次の一節の解釈についても異議が生じる。

我（狭衣）も幼くおはせし折は、かたみにかくのみ幼き人はめでたきものとのみ思しならひたるを、やうやう物の心知りゆくまに、この御様ならん人を見ばや、さらざらんこそ生けるかひなかるべけれ、と思ししみにければ、かくいとすさまじき御心ながらも、おのづから心にくき辺り辺りを、いかにせん、いかにせんとのみ、もの嘆かしう、やうやうなりたまひて、

（巻一・二八頁 傍線筆者）

文意は「幼い時に、二人は実の兄妹のように暮らし、お互いに相手を素晴らしい人と思って暮らしていたが、狭衣のほうは物心がつくに従い、源氏の宮のような方と一緒にになりたい、そうでなければ生きている甲斐もないと思ひ込むようになってしまっ

た」というのだ。それはつまり、近親相姦の禁忌（インセスト・タブー）を犯すような恋愛感情を持つてしまったという事である。全集は、この「かくいとすさまじき御心ながらも」の「すさまじき」を、「このように全く女性に見向きもなさらぬようなお人柄でありながらも」と解釈されている。もしかしたら全集は「全く女性に見向きもなさらぬようなお人柄」の前に（源氏の宮以外には）という言葉で補うつもりなのかと推測してみたが、そうであるなら一人の女性への純愛を表現するのであるから、「すさまじき」という表現は当てはまらないだろう。だとすると全集はやはり「女嫌い」という意味で解したのだと思われる。だが、ここはそう解釈してよいだろうか。その後続く文意も、

自然と心をひかれるあちらこちらの女君を、どうしよう、どうしようとはばかりお思いになると、しだいに何やら鬱陶しくなられ

（巻一・二八頁下欄、口語訳）

としておられる。しかし「女嫌いであるが、心ひかれる女と付き合いたい」とは矛盾していると筆者は思うのだが、いかがであろう。狭衣は女嫌いでありながら心ひかれるあちこちの女性に手を出し、鬱陶しくなっていく、という理解不能な狭衣像が物語の始発の部分で語られることは、この物語の主人公像の評価にもつながる重大な問題だと考える。狭衣は源氏の宮を心に秘めながらも、物語が展開して行く過程で、飛鳥井の女君、女二の宮、一品の宮、式部卿宮の姫君などと次々に悩ましい恋愛関係を結ぶが、その際に「女嫌いの狭衣」というイメージは、実態とはかけ離れている。この一節の解釈は問題の本質にも関わる、揺るがせに出来ない重要な問題ということが分かっていただけだろうか。筆者の解釈は全集とは異なり、ここという「すさまじき御心」とは、先にも述べたが、本来なら世間が受け入れない妹への恋愛感情と解釈すべきだと考える。（自分自身でも持て余す、世の中に顔向けできないような愛情）というような意味である。もちろん実際には二人は従兄妹であり、当時ならその結婚は認められるものではあった。が、問題は実の兄妹と変わることなく育てられたというところにある。それは次の記述からも明らかである。

（狭衣と源氏の宮は）ただ双葉よりつゆの隔てもなく生ひ立ちたまへるに、親たちを始めたてまつり、よそ人も、帝、東宮なども、一つ妹背と思しおきたまへるに、我は我と、かかる心の付き初めて、思ひわび、ほのめかしたまふもかひなきものゆゑ、あはれに思ひかはしたまへるに①思はずなる心ありけると、思し疎まれこそせめ、世の人の聞き思はんことも、むげに思ひやりなく、うたてあるべし、（父の）大殿、母宮なども、並びなき御心ざしと言ひながら、この事はいかがせん、さ

らばさてあれかしとは、よに思さじ、いづ方につけても、いかばかり思し嘆かんなど、方々②あるまじきことと、深く思ひしりたまふにしも、あやにくにぞ御心のうちは碎けまさりつつ、いづくにいかに身をもてなし果てんと、心細く思さるべし。今始めたることにはあらねど、なほ、さらでもありぬべきことは、よろづにすぐれたまひつらん女の御あたりには、まことの御せうとならざらん男は、むつまじうおほし出でて、もてなさせたまふまじかりけれ。はやうは、③仲澄の侍従、宰相中将などのためしどももなくやは。

(巻一・一九―二〇頁・傍線筆者)

①は、狭衣がもしも源氏の宮に自分の心の内を告白したならば、「思はずなる心ありけると、思し疎まれこそせめ」(私を妹だとは思ってなくて、思いもよらず一人の女だと見ていたとは、嫌らしい人だと思いいなるだろう)という意味であり、続く「世の人の聞き思はんことも、むげに思ひやりなく、うたであるべし」は、「世間の人がこの事実を知ったなら、まるで同情するどころか、異常な者だと思われるだろう」という意味である。さらに二人を兄妹として育ててくれた両親は、「二人を結婚させようなどとは決して認めまい」ということ。

②「あるまじきこと」は文字通り、二人の恋愛はあつてはならないという狭衣自身の自覚の言葉である。

③の仲澄の侍従は『宇津保物語』の登場人物であるが、同腹の妹、あて宮に恋をしてその恋が到底叶わぬと知って恋死にしてみたら人物である。次の宰相の中将が誰を指しているのかは不明だが、恐らく妹に恋心を持った人物で、散逸物語の登場人物であった可能性もある。

さて、狭衣と源氏の宮は実際には同腹の兄妹ではない。けれども引用した一文から、彼らの周囲の人間はみな、狭衣、源氏の宮を同腹の兄妹と同じと見なし、そういう他人の感情を慮って狭衣自身も、源氏の宮への恋心を「あるまじきこと」と自己規制したのであった。

この辺の事情が『宇津保物語』を読むと実はよく分かる。いま、仲澄の侍従が、同母妹あて宮に自分の恋情を初めて明らかにする場面を引用してみよう。

侍従(仲澄)、あて宮の御方におはして、かく聞こえたまふ。

(仲澄) 池水に玉藻沈むは鴉鳥の思ひあまれる涙なりけり

とは御覧ずや、と聞こえたまへば、(あて宮は)あやしう思して、いらへきこえたまはず。この侍従も、あやしきたはぶれ

人にて、よろづの人の、婿になりたまへと、をさをさ聞こえたまへども、さもものしたまはず、この同じ腹にもものしたまふあて宮に聞こえつかむと思せど、あるまじきことなれば、ただ御琴を習はしたてまつりたまふついでに、遊びなどしたまひて、こなたにのみなむ、常にものしたまひける。

〔藤原の君〕一五〇頁・傍線筆者

仲澄自身、妹への恋情は「あるまじきこと」という認識を持っていたことが表明されている。こういう近親愛を描くことは、タブーではあるが、また文学的題材として昔から取り上げられてきたものでもあった。例えば『伊勢物語』四十九段では、

むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、

うらわかみねよげに見ゆる若草を人のむすばむことをしぞ思ふ

と聞こえけり。返し、

初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな

（新編日本古典文学全集『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』一五五頁）

という段もあり、読者を惹き付けるテーマであったことは疑えない。この刺激的なテーマとして、『狭衣物語』でも「あるまじきこと」と二人の関係を捉えていた事は先に引用したとおりである。つまり設定を変えはしたが、狭衣と源氏の宮との恋愛を、遠くは『伊勢物語』、近くは『宇津保物語』を下敷きにしていることがこれでよく分かると思う。想像するのだが、恐らく狭衣の作者は同腹の關係に設定してしまえば、『宇津保物語』の二番煎じになってしまうという思いがあったのかもしれない。しかし、実質的にはそれと同じ状況にすることで、二人が将来的にも絶対一緒にない環境を作り上げるのが狙いだったのだ。『宇津保物語』の仲澄は自分の恋心をあて宮に打ち明けるが、つれなく無視され続け、あて宮が東宮に入内する状況の中で耐え切れず命を落としてしまう。物語の展開としてはそういう形でしか決着を付けられなかったのであろう。

（あて宮からの文を）侍従見たまひて、文を小さく押しわぐみて、湯してすき入れて、紅の涙を流して、絶え入りたまひぬ。殿のうち揺すり満ちて、惑ひ焦がれたまふこと限りなし。あて宮聞こしめして、いみじく悲しと思す。

〔あて宮〕一四三頁

仲澄は、あて宮から無視され続け、結局命を落としてその愛の形は終わりを告げた。しかし狭衣の場合は、源氏の宮に対する恋情を抱きつつ、その思いは物語の最後まで貫き通される。つまり狭衣は誰にも打ち明けられない近親愛という苦しい恋心を抱き続け、その中で新たな愛を育んでいくことが物語の重要なテーマになっているのだ。これは『源氏物語』など平安朝物語の一つの定型であり、源氏では義理の母藤壺に対する秘められた悲恋であり、後期の物語『夜の寝覚』では、妻の妹、中の君に対する悲恋であった。狭衣の場合には、それが妹ということになろう。源氏、寝覚ともに男君との間に子を生すが、それは不倫であり世間を憚るゆえに、公表されることはない。狭衣の場合は最後に帝の位にまで上り詰めながら、心の底には源氏の宮を慕い続けて行くという筋立てになっている。その人生は、源氏の宮以外にも何人かの女性と様々な恋愛関係を繰り広げながら、いつも源氏の宮に対する秘められた恋情が影を落としていた。

さて、そういう『狭衣物語』に様々な影響を与えたであろう先行文学を点検し、あらためて最初の問題に立ち返ると、「御心ながらも」以下は、(そういう源氏の宮へのお気持ちを秘めながら、心も通じ合わないあちらの女性こちらの女性を、自分の心を偽り、迷いながら付き合い続けることで、だんだんこの世が嘆かわしくなっていく)のように解釈するときに初めて様々な矛盾が解消されるのである。つまり、最愛の女性への愛情を封印したまま他の女性へ心を向けようとしても、虚しさだけが次第に募ると洩らしているのである。だから、狭衣が新たな女性と関係を結ぼうとする時、いつも躊躇するような言動が見られる原因はそこにある。狭衣が女嫌いという解釈では『狭衣物語』の本質は決して捉えられないし、『狭衣物語』の本質を見誤ることになるという筆者の主張も理解していただけるだろうか。

『狭衣物語』の作者が『宇津保物語』の仲澄とあて宮との恋のあり方を取り込んだ理由は、絶対に成就しない恋を描きたかったからではないだろうか。つまり宇津保の場合は、同腹であるからそれは絶対に成就しないことがあらかじめ読者に想像できた。狭衣の場合は同腹ではない。けれど同腹の兄妹と同じように育てられたという設定によって、『宇津保物語』を乗り越え、新たな展開を狙ったのである。そして、そこに読者を引き付けるための仕掛けがあった。こういう設定を仕掛けることで、主人公と女性たちとの恋には、常に緊張状態が生まれるようになったのである。

ところが時代が少し下るだけでも、このような内に秘めた思いを読み解くことは難しいものになってしまったようだ。この事に関しては、『高等科紀要』十四号で、「『夜の寝覚』の研究―四『夜の寝覚』の成立年代を考える」、五『寝覚物語』の切り開いたもの」ですでに論及したところであるが、いまその関連する箇所を引用してみる。平安後期物語が、新たなテーマを模索しながらも、結局散逸物語への道を辿らざるを得なかった理由を明らかにするために、長くなるが引用することにする。

『寢覚物語』は『浜松中納言物語』などに比べると難解な物語だと思う。その理由となるのが『寢覚物語』独自の精神世界を追求しようとしたためではないかと考える。当時の物語の役目はもちろん、内容の面白さで読者をどれくらい楽しませることが出来るか。読者側でも物語に仕掛けられた先行物語や和歌に気づくことが楽しみの一つであつたろう。この時代になると物語は単なる娯楽のための暇つぶしとともに、人生の問題にも目を向け始めたということであろうか。物語りは読者に受け入れられなくては存在価値は無い。そこで『寢覚物語』の作者が挑んだのは、人間の心の奥底に潜むもの、それは普段自分自身にも気づくことの出来ないような深層心理に光を当て、読者にも自分でさえいつもは気づかない不気味な自己を垣間見せようとしたのではないか。

『夜の寢覚』に次のような場面がある。「寢覚の上が愛する男君の正妻女一の宮が、物の怪に苦しむと、その物の怪の中に、寢覚上の生き霊を名乗るものがある。寢覚はこの噂を人から聞き、驚き深刻な打撃を受け、自分が女一の宮に嫉妬の情など持つはずがないと自己の生霊説を否定するが、でも本当に否定しきれぬだろうか、と思い自分の心の奥底にまで眼を向けようとする。原文では次のように記される。

まことにいみじうつらからむ節にも、身をこそ恨みめ、人をつらしと思ひあくがるる魂は、心のほかの心といふとも、あべいことにもあらぬものを。人の上、よきことをば、さももてはやさず、消えぬめり。よからぬこととだにいへば、言ひ扱ふものなめるを、いかにいみじう聞き伝へ、世にも言ふらむと思ふに、

(小学館・新編日本古典文学全集『夜の寢覚』三八八頁)

「あべいことにもあらぬものを」の解釈は研究者によって異なる。が、野口元大氏がここを反語で訳すべきとし、「他人が恨めしいと魂がわが身からさまよい出るといふことは、無意識の心の奥でさえあるはずもないことなのに。(でも実はそういうことが事実あつたのだった)」とカッコ内の語を補って訳した。自分の意識の奥の自分も知らないものが女一の宮に取り付いているとしたらと思ひ悩み、恐ろしい「心のほかの心」わが身をおぞましいと思う。自己の心理の内奥への探求という点においては、『寢覚物語』は『源氏物語』を一歩進め得た作品になっていると考える。

右のような内容を前回「高等科紀要」誌上で発表したのだが、現代の我々にはこのような反語表現に隠された作者の意図を理解することは極めて困難になっているのではないか、という思いを『夜の寢覚』を研究した時に強く感じ、そして、それを発表

しなかったのだ。平安後期物語は、厳しい批評に晒されながら何とか読者に気に入られるものを作りだそうと苦心したに違いない。しかし彼らの前には『源氏物語』という巨大な存在があった。そこで恐らく後期物語の作者たちの幾人かは、その創作過程で、『夜の寢覚』のように、人間の深層心理を描き出そうとする道を選択したと思われる。問題はそうした人間の心理を描き出す力量が、作者側に備わっていたかということだ。また人間の心理を描いていくような作品を読者側が求めたかという問題も存する。一部の読者には熱狂的に受け入れられても、もはや多くの読者を納得させるような作品は生まれ難い時代になってしまっていたのではないだろうか。物語作者たちは、もう読み捨てられることを覚悟で創作を続けるしかなかった、そういうところにまで追い詰められていたのではないか。しかも時代は激動していた。価値観もまた激しく変わるこの時代、物語が発表された同時代の空間でなら共感と呼んだものも、少し時間が経過しただけで、最初意図した内容がどれだけ後世の読者に理解され得たであろうか。筆者は極めて懐疑的、否定的に考えている。そのこともあり『狭衣物語』のテーマがはたして次の世代に正しく読まれているのが気になるのである。

## 二 『狭衣物語』の成立年代について

『狭衣物語』の成立年代については、近年の研究で延久年間（一〇六九）～永保二年（一〇八二）あたりだろうと考えられている。しかし『狭衣物語』はその異本の群れが夥しいことから、一体いつをもってその成立と決めるのであろうか、という問題は残るが、この小論では、巻一～巻三は深川本、巻四に関しては伝二条為定本を底本とし、物語文中から成立に関係すると思われるいくつかの記述を考察してみたい。

### （一）、「前九年の合戦」と「將軍」表記から成立年代を考える

（飛鳥井の女君は乳母へ）「いづくなりとも、おはせん所へこそは。さらでは、いかが見おきたまはんも、安らかにやは思ふべき。（狭衣が通ってくるという）思ひかけぬありさまは、いかにもあるべきことならねば」とのたまふも、げにいみじう心苦しけれど、まことに知る人もなく頼りなきに思ひわびて、陸奥の国に將軍といふ者の訪るるを、さてや往なまし、と（飛鳥井の女君の乳母は）思ふなりけり。

（巻一・八七～八八頁・傍線筆者）

ここは、飛鳥井の女君が、乳母に対して見捨てずどこへなりとも連れて行ってくれと懇願している場面で、乳母のほうは自

分のところに通ってくる「陸奥の国の將軍といふ者」と一緒に東国へ行ってしまうかと迷っている場面である。ここで「將軍といふ者」という言い方に多少引掛かるものを感じるのだが。問題は、深川本には「將軍」の部分「さうく」とあるため、本来「佐官」さうくわんである可能性もあり、「將軍」なら、表記は「しゃうくん」が本来の表記である。古典大系は「將軍」とするが、古典全書・古典集成は「佐官」として意見が分かれている。しかし、「陸奥の国」という言葉が前にありながら、四等官である「佐官」というのは、この場面ではいかにも収まりが悪いように思う。長官は將軍であり、続いて副將軍、軍監、軍曹というのが四等官であるから、佐官は軍曹という東北を管轄する最下層の役人が都にフラフラと出て来て、乳母に言い寄り、乳母もそのような男につき従って東北まで下っていくということが有り得るのだろうか。対する「將軍」とは、もちろん律令国家において東北地方の蝦夷を鎮撫するための遠征軍指揮官を意味し、六国史などの歴史書や経国集などにはその名が散見するが、仮名文学に出てくるのは珍しい。その中で『大和物語』に次の一節がある。

忠文が陸奥の国の將軍になりて下りける時、それがむすこなりける人を、監の命婦、しのびてあひ語らひけり。うまのはなむけに、めとりくりの狩衣・うちき・ぬさなどやりたりける。

（小学館・日本古典文学全集『大和物語』六九段・傍線筆者）

ここである（藤原）忠文は、平将門が東国で謀反を起こしたので、天慶三年（九四〇）正月十九日に征東大將軍に任じられた人物である。いま当該箇所底本は天福本で「將軍」は漢字表記でなされているので問題はないが、先にも述べたように『狭衣物語』においては、原文に疑問があるため異なる解釈が存在していることはすでに述べた。ただ従来「將軍」については指摘されていないので、ここでそのことを明らかにしつつ、特に「前九年の合戦」に注目して、その戦いと「將軍」のあり方を考え、『狭衣物語』の成立時期についても言及したい。

平安中期の永承六年（一〇五二）～康平五年（一〇六二）に陸奥の国北部で起こった安倍氏の反乱を、通例前九年の合戦と呼んでいる。この戦いは、古代の胆沢に、降伏蝦夷（律令国家に帰属した蝦夷）、すなわち「俘囚」と呼ばれる人々が集団的に定住していたが、十一世紀前半には、安倍氏が首領となり、朝廷に税を納めず、その地方を自分の領国のように支配したので、国家も反乱とみなし、永承六年、陸奥守藤原登任を派遣、しかし安倍氏にかえって大敗を喫した。そこで朝廷は、新たに源頼義を陸奥守・鎮守府將軍に任じたが、その時俘囚である清原光頼・武則兄弟が一万の大軍を率いて加勢、これにより頼義は勝利できた。

この事件は当時世の中を揺るがす大事件であったようで、多くの書物に記録されている。叛乱を起こした安倍氏の首が京都に送られてきたときのことを『今昔物語集』は次のように記している。

京二入ル日、京中ノ人、此ヲ見罵ル事限ナシ（二十五の十三）

そして『百鍊抄』、『朝野群載』をはじめ多くの古記録に「俘囚」という言葉が使われていることは、当時東北でどのような大事件が起きていたのか、そしてそれがどのような結末を迎えたのかを、京都人は多大の関心を持っていたはずである。そしてこの事件の論功行賞によって、清原武則は、康平六年（一〇六三）二月二十五日、俘囚という出身でありながら、従五位下鎮守府將軍に任じられた。これまで俘囚（現地人）が鎮守府將軍に任じられたことはなかったのだから、京の人々にも驚きを持って受け止められた人事であったろう。それ以降延久三年（一〇七一）には清原貞衡という人物が鎮守府將軍に任命されているが、当時の將軍職の記録はそれほど残っていないことが多い。ただ言えることは、当時の「將軍」には、それ以前の京の人々が抱いていたイメージとは異なるものがあつた。（参考『蝦夷の末裔』前九年・後三年の役の実像 中公新書 高橋 崇）

この事実を『狭衣物語』の先ほどの当該箇所にてはめると、鎮守府で「佐官」という位の者が本当に京にやって来て、女に言い寄ることなど有りえるかという疑問を先に述べた。それに加えて、鎮守府の最下層のそれも恐らくは俘囚である人物を乳母は到底頼らないのではないか。何しろ彼女は落ちぶれたとはいえ、もとは「主計頭の妻」（八五頁）であつたのである。そして、先にも「將軍といふ者」という表現に引つ掛かると述べたが、今、『狭衣物語』がいう「將軍」はつまり都の貴族が任命されたものではなく、俘囚が任命された「將軍」を意味していると考えられる。それは將軍とはいえ、『大和物語』に記された將軍とは異質なものと当時の人々には受け止められていたはずである。それが「將軍といふ者」という曖昧な表現に滲ませてあるのではなからうか。こういう考察からすれば、「佐官」説はあり得ないという結論に達する。そしてここはやはり俘囚である「將軍」と解すべきだと考える。その上で、「將軍」の実態が前九年以降の俘囚將軍を反映しているとすれば、『狭衣物語』の成立も康平六年（一〇六二）以降に都人に俘囚「將軍」のイメージが広まった後と考えるべき判断材料となるだろう。

## （二）、浅間山の記述から『狭衣物語』の成立年代を考える

次に引用する一節は、狭衣が宰相の中將の妹の姫君に心惹かれ、歌のやり取りをする場面で次のような和歌が詠まれている。

(狭衣) くらべ見よ浅間の山の煙にも誰が思ひか焦がれまさと

(妹母) あさましや浅間の山の煙には立ちならぶべき思ひとも見ず

(巻四・二六二頁)

浅間山の噴火の記事から物語の成立年代を考えることは、すでに『高等科紀要』十四号で、『夜の寝覚』の研究―四『夜の寝覚』の成立年代を考える』で同様の趣旨のことを書いていたので、今回はそれを参考にしながら論を展開したい。

『古今和歌集』巻十九「雑体歌」に、

(一〇五〇) 雲晴れぬ浅間の山のあさましや人の心を見てこそやまめ

(日本古典文学全集『古今集』)

という和歌がある。「雲晴れぬ浅間の山の」は序詞で、同音で「あさまし」を引き出すのだが、「雲晴れぬ」は浅間山の噴煙を意味していると考えられている。また同じ時代に成立した『伊勢物語』にも浅間山に関する次のような記述がある。

むかしをとこありけり。京や住み憂かりけむ、あづまのかたに行きて住む所求めむとて、友とする人ひとりふたりして行きけり。信濃の国、浅間の嶽にけぶりの立つを見て、信濃なる浅間の嶽にたつ煙をちこち人の見やはとがめぬ

(新日本古典文学大系『伊勢物語』八段)

これらの記述から十世紀頃には「浅間山」から噴煙が出ていたことが推測される。その後浅間山は一時休止状態であったようだが、中御門宗忠の日記『中右記』の天仁元年(一一〇八)九月五日の条に浅間山大噴火の記事が載っている。

左中弁長忠陣頭において談じて云はく、近日上野国司解状を進て云はく、国中に高山有り麻間峯と称す。而して治暦の間より峯中細く煙出で来り。その後微々なり。今年(一一〇八)七月二十一日猛火山嶺を焼き、その煙天に属し砂礫国に満つ。【火畏】燼庭に積もり、国内の田畠之に依り已に滅亡す。一国の災い未だ此の如き事有らず。

(増補「史料大成」『中右記』三)

この大噴火は藤原忠実の日記『殿暦』や『神皇正統録』にも記録されていて、天仁元年(一一〇八)七月に浅間山は記録的な

大噴火を起こしたことが分かっている。注意すべき点は噴火に先立つこと約四十年前の治暦年間（一〇六五―一〇六九）から噴煙がかなり立ち上っていたが、「その後微々なり」という記述によれば、天仁元年にいたるまで浅間山から噴煙は立ち上っていたという事である。それは『古今集』や『伊勢物語』の時代に盛んに噴煙を上げていた浅間山は、それ以降十一世紀の半ばまで活動が収まっていた、ということが知られる。その浅間山が治暦年間に久しぶりに噴煙を上げたという事実は、都人には極めて高い関心を集める情報だったのではないか。その情報が、人々に刺激を与えたからこそ浅間山を物語中に引き合いに出す意義もあつたと考えられるのである。浅間山が都人にとって気になる山であつたことは、例えば『山家集』恋の歌に、

（六九六） いつとなくおもひに燃ゆるわが身かな浅間のけふり湿（しめ）る世もなく

（和歌文学大系二十一『山家集・聞書集・残集』）

「浅間山の噴煙が衰える時が来ようとは思われないように、あなたへの思いが火のようにいつも燃えている」という歌がある。これは天仁元年の浅間山大噴火の記憶を背景として詠まれた歌だが、都人にとって、浅間は噴火していることに意義があるという考え方を補強するものであろう。このことから考えて、『狭衣物語』は、少なくとも治暦年間（一〇六五―一〇六九）以降に書き上げられたという一つの証拠となると考えるのである。

### （三）、疫病の記述から『狭衣物語』の成立年代を考える

次の一節は、世の中に疫病が流行り高位の方々も次々に病に倒れる中、帝自身も病に犯されながら、跡継ぎもままならない細かい状況を記した箇所である。物語は今後意外な展開になっていくきっかけとなる場面でもある。今問題にしたいのは、ここで描かれる疫病の描写が、実際に起きた歴史的な事実を背景にしているのではないかと推測されることである。

（一） その頃、世の中いと騒がしうて、（a）道大路にゆゆしきもの多う、やんごとなき人もあまた亡うなりなどしたまへば、

あはれにはかなきことを誰も思すに、帝も、何となう例ならず思されて、心得ぬさまの夢騒がしう見えさせたまへば、（b）  
我が世の尽きぬるにやと心細うならせたまふにも、継ぎのおはしまさぬことをいかでか口惜しう思さざらん。

（巻四・三三八頁 傍線筆者）

(2) (a) 夏深うなるままに、世の騒がしさもいやまさりにて、高きも賤しきも、残る人少なげになり行きつつ、月・日・あめ・星のけしき、雲のたたずまいひも静かならず、心あわたたしきさまに、(a) 帝もいとど悩ましうのみなりまさりたまへば、なほわが世は尽きぬるなめりと思しめして、昔の一条院に、降り居させたまふべきになりぬ。(b) 年ごろも、継ぎのおはしますまじきにやと、口惜しきことに、明け暮れ思しめしつれど、さりともあるやうあらなど頼み過ぐさせたまへるを、きのふけふとなりては、なほ、いと本意なきことに思しめすこと限りなし。

(巻四・三四一 傍線筆者)

二つの記事は、いずれも同じ疫病の流行を描いたものである。それぞれの波線の箇所は疫病によって多くの死者が出た様子が描かれ、普通の傍線部分は物語の展開上重要となる、帝の後継ぎ問題に関連した記述である。いま疫病の記述に注意を向けると、(1)の波線にある「道大路にゆゆしきもの多う」は、通りには疫病で倒れた庶民の死体がたくさんあり、高貴な方々もたくさん亡くなられ、帝も具合が悪くなっているということである。(2)の波線部分では、疫病が次第にその勢いを増し、異常気象も起き、帝もいっそう病勢が進んだという。

実は、この描写に極めて似通った疫病の流行が「古記録」類に記録されている。例えば『百鍊抄』の承暦元年(承保四年改元一〇七七)の条に、

依旱魃并赤斑瘡

今年、上自后宮大臣、下至庶人、皆煩赤斑瘡。親王、公卿以下逝去者多。権右中弁、師賢一人免此難。敦賢、敦文両親王、依斑瘡薨。

(新訂・増補国史大系『百鍊抄』)

つまりこの年、旱魃があり、赤斑瘡(はしかの古称)が蔓延し、上は皇后・大臣から下は庶人に至るまで亡くなったというのである。はしかは一度罹患すると、免疫が出来て再び罹りにくくなる。そのため免疫を持たない次の世代が多くなると再び流行をみる。後で『栄華物語』を引用するが、この年の赤斑瘡は稀に見る大流行であったと記されている。

『朝野群載』には同じ疫病が次のように記されている。

赦免宣旨仰

別当正二位行権中納言兼右衛門督藤原実季宣。

奉勅。近者乾坤屢呈變動異。華夷間有疾疫之憂。消其灾殄不如之……仍可大赦天下。

承保四年五月四日

左衛門権佐藤原朝臣敦宗奉

(新訂・増補 国史大系『朝野群載』卷第十一「延尉」・「国史大系」・傍線筆者)

波線部の意味は、「近くは天地がしばしば変動し異変を呈している。国の内外では疫病が蔓延している。これを収束させるためには、天下に大赦を行なうべきである」、というのである。

また左大臣源俊房の日記『水左記』の承保四年(承暦元年)八月四日の記事を見ると、俊房自身も疫病に罹患し、暑さの中の心細い思いが綴られている。

寅時許雨盛降、即止。去六月十四日驟雨之後、不雨。天下旱魃。及今夜雖雨、嫁穡無幸無益歟。自朝終日陰。心地雖熱氣消散、赤痢已發。辛苦無極。

(増補史料大成8「水左記・永昌記」)

「今夜雖雨、嫁穡無幸無益歟」とは、「嫁穡」つまり農作物には、今晚の雨も焼け石に水というような意味で、いかにこの年の旱魃がひどいものであったかが伺われる。

当時の記録類に、これだけ記録が残されているのを見ても、これが大変な疫病の流行であったことが分かる。そして、『狭衣物語』にある、「月・日・あめ・星のけしき、雲のたたずまいひも静かならず」についてが、『朝野群載』に記されている「近者乾坤屢呈變動異」などの異常気象の記述と一致する。

さて、この承暦元年(一〇七七)の赤斑瘡の流行に関して、『栄華物語』にはさらに克明な記述がある。

(承保四年(改元して)承暦元年)四五月ばかりより赤裳瘡といふこと出で来て、世の人病むなど聞こゆるに、六七月になりてはいみじう病みまさりて、残るなく聞ゆ。五十三年に出で来たれば(注・万寿二年に赤裳瘡の流行があり、それから数えて今年が五十三年目にあたる)、老いたる若きとなく、親子も分かずひとたびに病みければ、起きたる人少なくぞありける。六七十の人は人のもとに少なければ(一度罹病すると、免疫が出来、二度は罹らないから)、いといみじくなんありける。昔なんかかる裳瘡出で来たりける。督(かん)の殿(嬉子)のうせさせたまひしをりはいとかくはあらざりけり(五十三年前はこれほどひどくはなかったということ)。三百年ばかりになりたるになん、かかりける(承保四年の大流行はほぼ三百

年ぶりにこのような事態になったということ。秋深くなりては、よき人々病ませたまふ。内（白河天皇）、中宮（賢子）、宮たち、関白殿の上、大将殿など、皆同じほど、すこしうちすがひ（同じ位か、ちょっと時期がずれて）などして出でさせたまへば、御祈り数知らず。式部卿宮うせさせたまひぬ。御女におはしませば、齋宮おりさせたまひぬ。八月に……なくなりぬ。中納言、兵衛佐は、上もなくなりたまひぬ。あさましき世にぞ。……

（日本古典文学全集『栄華物語』巻三九「布引の滝」四九三頁）

『栄華物語』の記述と、『狭衣物語』の記述を比較検討してみよう。

『栄華物語』には「四五月ばかりより赤裳瘡といふこと出で来て、世の人病むなど聞こゆるに、六七月になりてはいみじう病みまさりて、残るなく聞ゆ」とあるが、『狭衣物語』では、（2）に「夏深うなるままに、世の騒がしさもいやまさりにて、高きも賤しきも、残る人少なげになり行きつつ」という一致があり、また（1）「帝も、何となう例ならず思されて、」（2）「帝もいとど悩ましうのみなりまさりたまへば」と、帝が罹患したことが両者ともに記されている。そしてこのような疫病の大流行は「三百年ばかりになりたるにん」ということから考えても、それほどの大流行を狭衣が創作したと考えるよりも、この流行自体を背景にして物語が記されたと考える方がしっくりする。くり返すなら、これらの事実を比較検討するとき、この承暦元年の赤斑瘡流行の史実を下敷きにして、物語が書かれている可能性が高いということである。そうだとすれば、『狭衣物語』の成立は当然この赤斑瘡流行の年より後ということになる。そしてそれに関連して、もう一つ気になる記述が『狭衣物語』にある。それは、帝も病に罹り、気弱になられて狭衣への讓位という事態に物語が展開して行き、狭衣が齋院となられている源氏の宮を訪問する場面で、

常よりは暑さ心なき年にて、御前（齋院＝源氏の宮）にも悩ましきまで思しめさるるに、からうじて夕風涼しう吹き出でたれば、  
（巻四・三四六頁傍線筆者）

という記述がある。そこに「常よりは暑さ心なき年」、つまり例年にない暑い年であり、齋院も耐えきれないような思いをしているというのである。『百鍊抄』の承暦元年（一〇七七）の条に、「依旱魃并赤斑瘡」とあり、先に引用した『水左記』にも「天下旱魃」の文字が見えた。この年は旱魃であった。

『狭衣物語』に記される「常よりは暑さ心なき年」は、まさにこの年のことをそのまま表現したものであることはほとんど間

違いなだろう。そうだとすれば、その年の暑さというものが『狭衣物語』の作者に鮮明に記憶されている時期、恐らく承保四年（承暦元年）からそれほど時を置かない、場合によってはその翌年あたりには書かれたものではないだろうか。

以上のことを総合して考え、『狭衣物語』の成立時期は、承暦元年か二年（一〇七七―一〇七八）という年が想定される。

### 三 『無名草子』の『狭衣物語』批判について

『無名草子』の成立は、近年の研究で正治二年（一一二〇）―建仁元年（一一二一）の間であろうと考えられている（小学館新編日本古典文学全集『松浦宮物語・無名草子』解説参照）。そして、すでに考察した「狭衣」の成立年代が承暦元年頃だとすると、両者の成立の時間的な差は、百二十三、四年ほどとなる。現代において百二、三十年前の明治時代における文芸作品を読むとき、我々は果たして読書意欲を掻き立てられるだろうか。ちなみに今から百二、三十年前の作品なら、主だったところでは幸田露伴、尾崎紅葉、森鷗外、樋口一葉、泉鏡花、国木田独步、夏目漱石というような作家の作品になる。もちろん近代文学の研究者たちはこれらの作家たちに関して多くの論考をものし、それで我々も恩恵を受けてはいる。しかし研究という行為と、面白さを期待して読書に没頭することとは根本的には異なる行為である。そこで百二、三十年という時間差が作品鑑賞にどのような影響を及ぼすか考えてみると、時代を超えて読者に共感を持たれるものは生き残るが、その一瞬の時代感覚に訴えた利他的な作品はもはや受け入れられなくなってしまう、ということとは想像される。けれども百年超の時間差による環境の変化、それに伴って起こる人間の考え方や嗜好の微妙な変化は、時代が近接しているがゆえに、後代の人間にはあまり気づかれない可能性が大きい。その結果、本人は作品を正確に享受しているつもりでも、そこには勘違いが起きている可能性は十分にあり得るだろう。さて、『無名草子』は『源氏物語』の評論に続いて『狭衣物語』を挙げ、次のような批評を加えていた。

『狭衣』こそ、『源氏』に次ぎては世覚えはべれ。『少年の春は』とうちはじめたるより、言葉遣ひ、何となく艶にしみじく、上衆めかしくなどあれど、さして、そのふしと取り立てて、心に染むばかりのところなどはいと見えず。また、さらでもありなむとおぼゆることもいと多かり。

（小学館 新編日本文学全集『松浦宮物語・無名草子』一二〇頁）

とある。ここで私が注目するのは、『狭衣』こそ、『源氏』に次ぎては世覚えはべれ、つまり「狭衣は源氏に次いで世間の評判が高いけれど」と世間的には「狭衣」は評価されているが、「（私には）心に染むばかりのところなどはいと見えず」と貶し、「さ

らでもありなむとおぼゆることもいと多かり」と、『無名草子』の作者は「狭衣」をほとんど認めようとしないうように見える。もちろん『源氏物語』の次に挙げられたのも原因かもしれない。

ところで『無名草子』のいう「世」とは一体誰を念頭に置いているのだろうか。『無名草子』が書かれた同時代の読者を指しているのか、それとも百二、三十年前からの狭衣の読者を指しているのだろうか。おそらく後者だと思われる。何故このようなことをわざわざ断るのかと言うと、先にも述べたように百二、三十年という時間の経過は人間の考え方や嗜好に変化をもたらすと思うからである。しかも社会の枠組み自体が古代律令国家から中世封建体制へと大きく変わろうとしていた時である。そういう時代の変動期において、一時代前の物語を批評する『無名草子』の物語鑑賞は的を射たものであったかを検証したいのである。

この事に関しては、すでにこの論文の(一)で『夜の寝覚』に関連して、その一端を取り上げて、物語の正しい解釈の困難さを論証した。関心のある方は拙稿『高等科紀要』十四号、「『夜の寝覚』の研究―」を参照していただきたい。しかしここで問題にしたいのは、千年もの時代差があれば、その内容理解に行き違いが生じることは当然だと納得され易いが、百二、三十年という比較的短い時間差だと、ほとんど誤解を生じることなく、正しい解釈が行なわれるという思い込みに疑問を呈したのである。恐らくこれに対しては次のような反論が予想される。我々は同時代の作品を解釈するときにでも、正しい解釈は困難を伴うという意見である。それはその通りなのだが、しかし千年前の話になると、その当時の百年の差は無いに等しいと思いがちなのではないだろうか。

『無名草子』によれば、『狭衣物語』は、一般的に世間では「言葉遣いが優美で上品そうだが、どこと云って取り立てて感動するようなところは見られない」ということは、百二、三十年前の物語成立当時以来、読者は『狭衣物語』を「言葉遣いが優美で上品そうであり、感動する」物語だと読んでいる者がいたということであり、また『無名草子』の作者が『狭衣物語』を気に入らないとする「さらでもありなむ」(＝そのように書かなくてもよさそうな)の具体的内容を羅列すると、

一、狭衣の笛に感動して天稚御子が天から降臨すること。

二、粉河寺で狭衣が法華経を読むと普賢菩薩が示現すること。

三、賀茂神社の大明神が示現し、源氏の宮への懸想文を遣わしたこと。

四、狭衣が斎院の前で琴を弾くと荒々しい風が吹き、神殿が鳴動したこと。

ここで書かれたことを『無名草子』の作者は別の表現で「まことしからぬこと」と書いている。つまり真実性のないことは物語にはふさわしくない表現であるといいたいようだ。『夜の寝覚』や『みつのはままつ』などでも、俄かに信じられないこと、神

仏による靈妙不可思議な現象を描くことにはやはり『無名草子』は批判的である。それらは度々「まことしからぬこと」と指摘され、「さらでもありぬべきこと」として繰り返し批判している。

何事よりも何事よりも、(狭衣) 大将の、帝になられたること、返す返す見苦しくあさましきことなり。めでたき、ざえ、才覚すぐれたる人、世にあれど、大地六返振動することやはあるべき。いと恐ろしくまことしからぬことどもなり。

(新編日本古典文学全集・一二三頁)

と、巻四に入ると、突然のように帝の位に就くところは口を極めて非難する。狭衣が帝に即位するときには天照神の神託があったのだが、とにかく作者はそういうことを認めない立場を採る。だから『源氏物語』においても、「源氏の院になりたるだに、さらでもありぬべきことぞかし」と批判はするのだが、源氏の場合はそれでも辻褄が合うように書いてあるから、「さまでの咎(とが)にはあるべきにもあらず」という。この考え方で行くと、『竹取物語』や『宇津保物語』などは「まことしからぬことども」が多く物語中に現われるので、ほとんど認められないことになるのであろう。しかし『無名草子』は、物語評論に入る前には、「阿弥陀仏」や「法華経」のことに言及し、それらに關してはただ賛仰する態度から推測すると、逆に軽々しく仏神の靈妙不可思議な現象を描くことは、かえって不敬であると考えているのだろうか。「法華経」のところでは、

など『源氏』とてさばかりめでたきものに、この経の文字の一偈一句おはせざるらむ。何事か、作り残し書き漏らしたること、一言もはべる。これのみなむ第一の難とおぼゆる。

(一八七頁)

とあって、『源氏物語』に一言も「法華経」の語句が記されていないことに大きな不満を漏らし、「これのみなむ第一の難」と、『源氏物語』の最大の欠点とまで表現している。そうであるなら『狭衣物語』には、それこそ無数の「法華経」の語句が作品中に引用されている。恐らく平安後期物語の中でもそれは突出しているといえよう。けれどそのことに關しては手のひらを返したように、『無名草子』は無視を決め込む。「まことしからぬことども」を批判する作者だが、「阿弥陀仏」や「法華経」を取り上げ、称賛する。仏典にこそ「まことしからぬことども」が溢れているように思えるのだが、宗教的なものと物語ではどうやら一線を画すべきと考えているのであろうか。

繰り返すが、狭衣執筆時と、無名草子が成立した時間差は恐らく百二十―三十年、その時間の間に物語を受け止める感性の変

化が生じた可能性を指摘しているのである。平安後期の物語が達成した微妙な主人公の心の襞を描き出そうとする手法が理解され難くなっていたうえ、まだ物語としての幻想的な荒唐無稽さを許容する平安後期と、より現実的な物語を好む時代的な感覚の差異が存在したのではないか。今から見ればほんの百数十年の時間差に過ぎない。が、現代の我々にとってもそれだけの差があれば、もう理解しにくい文章表現があったのではないだろうか。近代の作家の作品でも現代の我々はよほど注意して作品に臨まなければ、時代に漂う一瞬の感覚を読み取れない可能性がある。というよりも当時の物語作者に、そこまで人間の心のひだを表現できるはずがないという思い込みがあるのかも知れない。ここでは百二十〜三十年の時間差でもそのようなことが起こりうるということ提起しようとしたのである。『無名草子』の作者の時代にはもう読み取れなくなっていた可能性はある。そのため、源氏・狭衣が何故以前は並び称されていたのかについて理解が出来にくくなっていたのではないだろうか。

## 最後に

『栄華物語』には、裸子内親王のことを描いた次のような記述がある。

先帝をば後朱雀院とぞ申すめる。その院の高倉殿の女四の宮をこそは斎院とは申すめれ。幼くおはしませど、歌をめたく詠ませたまふ。さぶらふ人々も、題を出だし歌合をし、朝夕に心をやりて過ぐさせたまふ。物語合せとて、今新しく作りて、左右方にわきて、二十人合などせさせたまひて、果ては御心もたがはせたまひて、いと恐ろしきことを思し嘆かせたまふ。

（新編日本古典文学全集『栄華物語』巻三十七「けぶりの後」四〇二頁）

『狭衣物語』の作者と考えられる六条斎院宣旨は、多くの物語作家に囲まれながら、よく言えば切磋琢磨、悪く言えば、同僚の嫉妬と羨望に取り巻かれる中での執筆であったと考えられる。彼女は『狭衣物語』以外にも、引用文の中にある「物語合せ」、正確には天喜三年（一〇五五）五月三日に催された、「六条斎院家物語合」に参加し、

たまもにあそぶ権大納言

せじ（宣旨）

ありあけの月のまつさはありやとてうきてもそらにいでにけるかな

（歌合……）

と詠んでいる。この『玉藻にあそぶ権大納言』は散逸物語ではあるが、『風葉和歌集』に十三首載り、『無名草子』でも評論の対象となり、定家の日記『明月記』にもいわゆる十物語の一つに上げられている。いづれにしても当時の代表的な女流作家であったことは間違いない。ということは彼女の作品は相当に注目されたであろう。しかしこの時代の物語り作者には大きな制約があった。それは先行する『源氏物語』という偉大な作品を取り込みつつ、新たな物語を創りださなければならないという暗黙のルールである。簡単に言えば、『源氏物語』にも描かれていない新しい愛の形を発見し、表現するということに尽きる。しかも目の肥えた読者を納得させるようなものでなければならぬという条件付である。

『浜松中納言物語』は二つのテーマを発見した。一つは輪廻転生、もう一つは舞台を唐と日本という時空を越えた愛の物語を創作した。『夜の寝覚』は年齢差を超越した愛というものをテーマにした。それらは新しい男女の愛の形を読者に気づかせてくれ、物語としての命を永らえることが出来た。見巧者な読者には『源氏物語』の二番煎じは許してもらえない。そういう眼力を持った読者に受け入れられたものだけが書き継がれ、後世まで命脈を保つことが出来た。享受者が受け入れを拒否した作品は、読み捨てられ消え去るしかなかったのだ。

では『狭衣物語』の新たな試みはどのようなものであったのか。それはまず先行する『宇津保物語』から着想を得た。冒頭部分にある天稚御子降臨の一節を見た瞬間に「宇津保」を取り込んだと読者には分かる。ではそのような伝奇的な物語が語られるのかと思って待ち構えていると、実はこの物語の狙いは宇津保が、同腹の妹あて宮に恋心を抱く近親愛というテーマにあった。しかしそれは決して成就されることなく兄、源仲澄の死によって終わりを告げる。『宇津保物語』においては、あて宮物語の中の一つのエピソードにしか過ぎない取り扱いになっていた。「狭衣」の場合は兄妹ではなかった。けれども実の兄妹同様に育ったという設定によって、狭衣と源氏の宮は決して結ばれることが許されないことが前提条件として据えられた。主人公狭衣は決して実らない源氏の宮への愛を抱き続け、新たな女との出会いを続け、様々な恋愛模様をつむぎ出す。つまり、一人の女性への愛を貫きながら、新たな女性へ愛情を持つことは可能であろうか、という課題に答えようと試みたのが『狭衣物語』という作品であった。そして、その時の心理状態、心の襞を描き出そうとした。こういう登場人物の心理状態を描こうとする態度は、『狭衣物語』の発見ではなく、『源氏物語』以来次第に人間の深奥部まで目を向け、その心理を描き出そうとする傾向にあったが、『夜の寝覚』でほとんど行く着くところまで行った感がある。けれども恐らく裸子内親王のサロンに属する多くの女房作家たちは、しのぎを削って新たな愛の形を見出し、物語中に創造しようとしていたと考えられる。『狭衣物語』の作者宣旨も『源氏物語』をはじめ多くの先行作品を意識しつつ、作者独自の新たな試みを付加し、目の肥えた読者を唸らせようとしたに違いない。しかし、その試みが同時代の読者を強く意識したものほど、後の時代の読者には理解されにくいものとなっていた。それは『狭衣物語』

に引用されていた、散逸物語の多さでも実感できるところである。『狭衣物語』の作者は同時代の物語をよく読んでいたようだが、彼女が愛読した多くの作品は、すぐ後の時代の人々にはもはや受け入れられなかったのであった。

我々は平安時後期物語を正しく読めているのだろうかということだが、この小論で明らかにしようとしたことであつた。思えば、後期物語は不幸な運命を背負うことが定めとして生まれてきたといえる。例えば、太陽系における太陽のような『源氏物語』の影響からは決して逃れられない惑星のような存在、それが後期物語なのだといえよう。しかもその太陽のまぶしさによってそれぞれの実態は覆い隠されてしまっている。だが、その惑星となることが出来る星さえ数えるほどしかなく、多くは彗星のように宇宙のあなたにあてもなく漂う運命であつた。それが散逸物語に相当しよう。けれどもそんな無数の散逸してしまつた物語も、実は一つ一つが読者の気持ちを獲得しようと、必死の努力がなされたものであつたに違いない。しかしそうして人間を描き出すとした新しい試みは、時代感覚の相違によつてすぐに理解されなくなり、読み捨てられてしまつた。だが、もし『夜の寢覚』のように、さらに奥深い人間の真実を描こうと意図した作品が存在したなら、現代の「私小説」にもつながる興味深いテーマになるはずだと勝手な妄想をしている。それはさておき、多くの散逸した物語は、今では決して知ることの出来ない、その時代の微妙な人々の気持ちが見える貴重な資料でもあつたのである。(終わり)